

ソーシャルワークを学ぶ学生の被災地における体験的な学びについて

—東日本大震災避難所ボランティア活動を通して—

○ 東北福祉大学 阿部 利江 (7795)

三浦 剛 (東北福祉大学 1684)

ソーシャルワーク教育、生活モデル、エンパワメント

1. 研究目的

東日本大震災以来、「災害時におけるソーシャルワークとは何か」が問われている。避難所での生活支援のみならず壊滅した地域生活支援のための基盤をどう再構築していくか、私たちに求められるこれからの役割は大きい。

また、被災地でソーシャルワーク教育に携わるものとして、今後の地域生活支援の担い手になるであろう学生に、この経験からソーシャルワーク学習に結びつく何かを学び取って欲しい、自ら被災しながらもこの惨状を前に、心を突き動かされボランティア活動を行う学生たちを見ながら、報告者らはそう考えてきた。

今回は災害急性期における対応が一応の落ち着きが見られた時期の（当然地域によって異なるが）避難所での生活支援ボランティア活動を通じ、学生にソーシャルワークの基本を体験的に伝えることを計画した。多くのボランティアニーズのあるなか、避難所で生活する被災者に話し相手や生活の手伝い、子どもの遊び相手を通して直接的にかかわることと、避難所の閉鎖までを目標に継続的にかかわること、の二点を定め活動した。その活動を通して学生が得た気づきや学びを、観察結果と記録をもとに整理し、どのようにソーシャルワーク教育に結び付けることができるのか考察することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

1) 研究の視点

この直接的で継続的な活動は「生活」をより強く意識している。したがって参加学生は環境と被災者の生活が変化していく過程を体験できるだろうと予測した。この変化の過程から学生が何に気づき、何を学んだのかを、生活モデルの枠組みと関連づけることができないう仮説を立てた。記録の分析からこの枠組みに位置づけられる気づき、学びの категорияが抽出されれば、それを視点としてソーシャルワーク教育に結びつけていくことができるのではないかと、これが今回の報告の視点である。

2) 研究の方法

2011年4月12日から7月31日までの約4ヶ月間(実質;37日間)、一カ所の避難所(最大避難者数;170名)でのボランティア活動を実施した。この活動には、延160名(実人数78名)が参加した。今回は5日間以上の活動をおこなった学生7名を対象とした。

これらの学生の活動の様子を報告者らが観察し記録した。また、学生による個別の活動記録も収集し、それらの記述内容をカテゴライズした結果を照合し分析した。

3. 倫理的配慮

活動記録に関して、その記入内容が大学における何らかの学生評価につながるものがないこと、記録は個人が特定されることや外部に漏れるものがないように十分な注意を行うことについて十分に説明をした。

4. 研究結果

観察記録と学生の活動記録から、学生の気づきや学びは下図のようにカテゴリー化することができた。それらと関連するソーシャルワークの概念を「エンパワメントの重要性」、「信頼関係構築の重要性」、「連携・ネットワークによる支援の重要性」として結びつけた。

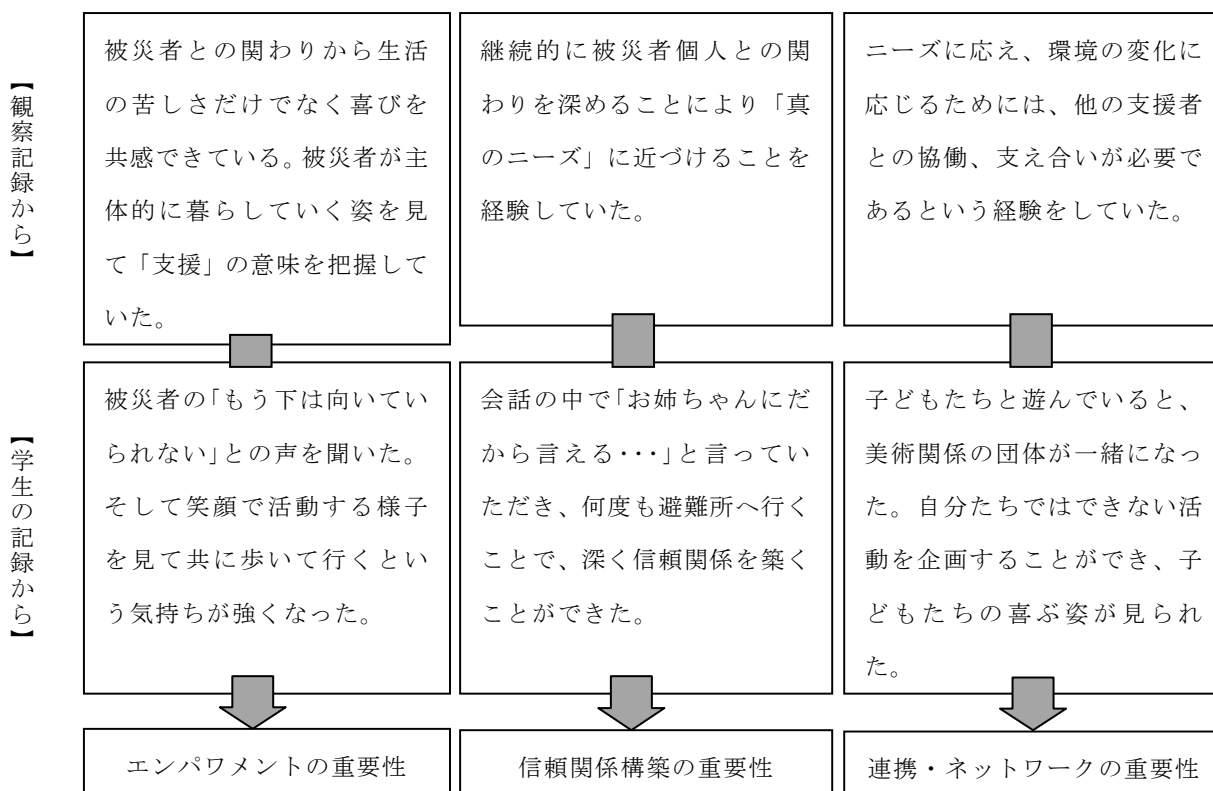


図1. 活動からの気づきとソーシャルワークの概念

5. 考察

学生の活動からの気づきや学びは結果のようにソーシャルワークの概念と関連づけられた。このことから直接的で継続的な、「生活」に視点をおいた活動から生じた気づきや学びであり、単発的な活動から得られるものとは異なるものであろう。これからの地域生活支援を担う学生に、今回の経験をソーシャルワーク概念に位置づけさせ、そのプロセスを振り返ることも合わせて、ソーシャルワークモデルの体験的理解を進めるための教育をおこなうことが我々には課せられている。